

## 言葉

大田市立志学中学校 三年 松尾柚珠羽

今年の四月に曾祖父が亡くなりました。戦前、軍人であった曾祖父は、戦後の帰民化政策もあって兵庫から三瓶に入植し、牛飼いを始めました。お金も仕事も食べ物もない戦後の日本において、せめて自分たちの食べ物くらいは自分たちで賄いたいという思いで、毎日休むことなく働き続けたそうです。

当時は今ほど機械がなかったので、ほとんどが手作業でした。三瓶の厳しい冬の寒さに辞めていく同志も少なくありませんでした。それでも、曾祖父は人生の大半をかけて酪農の経営基盤を築き上げ、祖父や父もそれを継いでいます。

私も仕事を手伝っていてSNSで牛飼いのについて調べることがあります。そこで目にしたのがアンチコメントです。そこには、「牛を引っ張って起こすのが痛そう」、「かわいそう」など、酪農をしている方たちが悲しむようなコメントがたくさんありました。その中で、私が一番傷ついたコメントは、「自分の生活費を稼ぐために育てている牛を殺す。最低な職業だ。」というコメントです。曾祖父が今まで長い年月を費やして一生懸命働いて、牛乳を作ったりしたのに、それを踏みにじるようなコメントでとても悲しい気持ちになりました。

酪農を営んでいる人は、牛を傷つけたいとか、殺したいと思ってやっているわけではありません。酪農家も、自分たちの何倍も体重も体格も大きい牛を相手に、日々仕事をしています。蹴られたり、踏まれたりして、大けがにつながることもあるし、最悪の場合死んでしまうこともあります。それでも日々、仕事を頑張っているのは、みんなに安心安全な食べものを届けたいという思いがあるからです。それなのに、その努力や生き方を否定するようなコメントをすることは、酪農家の人達を不用意に傷つけ人権を侵害しているのではないのでしょうか。牛が痛そう、かわいそうなどのコメントは私も同じように感じることもあるので、そう思ってしまうと仕方がないと思います。しかし、それをわざわざコメントにまで書いて、酪農をしている方達を傷つけることはやめてほしいです。

酪農に限らずSNS上では心ない言葉をかける人が少なくありません。それらの言葉を苦に自ら命を絶たざるを得ない状況まで追い詰められる人もいます。私は曾祖父を亡くした時、こんなにも簡単にいなくなってしまうのかと寂しく感じました。亡くなると、お互いに伝えたい言葉や思いを伝えられなくなってしまうことを実感しました。だから、決して軽はずみな言葉で人を傷つけて、死に迫りやることはしてはいけません。

一方で、投げかけられる言葉で救われることもあります。曾祖父の葬儀の時に葬儀屋さんの方が曾祖父の曲がった足を見て、「自分の足で一生懸命働いた証拠の足だね」と言っておられ、曾祖父の人生や生き方、努力を肯定してもらえたような気がして、私は救われたような気持ちになりました。

言葉は時には人を傷つけ、死に迫りやることもあり、時には人を救ったり、心を明るくしてくれたりすることもあります。言葉は言い方や伝え方次第で受け取る人の気持ちが大き

く変わります。だからこそ私たちは、発する言葉が相手にどう思われるか、どう伝わるかを考えることが大切だと思います。世の中のSNS上のコメントや人へ投げかける言葉が、こんな風に救われる言葉であったら、世界中のみんなが幸せな気持ちになり、救われる人が一人でも多く増えると思います。